

# 風をよむ

No.58 2001.09.25

編集：共産主義者同盟首都圏委員会  
発行：ウインドベル・ファクトリー  
連絡先：新宿区西新宿 7-3-10  
山京ビル503-201

定価300円  
年6回刊・送料込：2,300円  
郵便振替：00170-0-655767

## 9.27沖縄・一坪反戦地主会 関東ブロック 学習会 下地島（宮古）パイロット訓練飛行場への 自衛隊基地誘致決議（伊良部町議会）の実状

講師：寺川 潔（フリージャーナリスト）  
日時：9月27日（木）開場18:30  
会場：中野勤労福祉会館  
連絡先：沖縄・一坪反戦地主会 関東ブロック090-3910-4140

## ブッシュ来日・日米首脳会談への対抗アクション

10月13日（土）講演・討論の夕べ（韓国ゲストと共に）  
18:00開場・18:30開会／南部労政会館 [JR大崎駅前・大崎ゲートシティ内]

10月14日（日）集会とデモ  
13:00集合・13:30開会／宮下公園 [予定・渋谷駅下車徒歩3分]  
連絡先：日韓ネット03-5684-0194

## アジア共同行動・日本連絡会議呼びかけ集会

会場：中央区立日本橋公会堂  
日時：10月14日（日）11:00開会  
連絡先：AWC-J 0774-43-8721

## 11.18厚木基地抗議闘争へ

米帝・ブッシュ政権による「対テロ報復」に名を借りた、新たな戦争策動を許すな！  
反米テロリズムによる無差別攻撃ではなく、労働者階級被抑圧人民の国際主義的連帯を！……2

共産主義者同盟首都圏委員会 第12回総会に向けて……4

7・15共産同（全国委）政治集会への連帯のメッセージ……7

流 広志さんへの返事／次世代共産主義運動の再建を勝ち取ろう 竹田 晋……8

奇稿・沖縄頼り・6……10

土曜会・夏期合宿・報告／状況論—政治革命の再興 畑中文治……12

奇稿・（先住民族としての権利）と沖縄……16

# 米帝・ブツシュユ政権による「対テロ報復」 に名を借りた、新たな戦争策動を許すな！ 反米テロリズムによる無差別攻撃ではなく、 労働者階級被抑圧人民の国際主義的連帯を！

## 共産主義者同盟首都圏委員会

九月一日午前九時頃（現地時間）、ニュー・ヨークの世界貿易センタービル（ツイン・タワー・ビル）に相次いで二機の旅客機が激突し、二棟の同ビルは、数千人規模といわれる死傷者を出して瓦解崩壊した。これに巻き込まれた同じブロック内のビル数棟も同様に崩壊したという。世界的な富と繁栄、世界経済の金融的支配の象徴は、文字どおり廃墟になった。またほぼ同時に、ワシントンの国防総省ビル（ペンタゴン）にも旅客機が突入し、同ビルは大破し、二〇〇人もの死者が出たという。米国軍事力の司令部、世界に君臨する軍事支配の象徴は大きく傷ついた。更に一〇時ごろには、ピッツバーグ南東でやはり旅客機が墜落した。同機は、米国大統領専用別荘、キャンプ・デー

ーピット、あるいはホワイトハウスをめざしていたなどとも言われている。前者は言うまでもなくしばしばパレスチナ和平会談の舞台とされてきた。いずれの旅客機もハイ・ジャックされたものと見られ、その乗客乗員の生命はすべて絶望的とされている。

これらの前代未聞の事件は、ほぼ同時にハイ・ジャックを行った人々の意思によるものと考えられるが、いまだそのその当事者の主張は示されていない。事件の反米的性格、自殺攻撃、メッセージを伴わない軍事行動などという特徴から、米当局者および、マスメディアは、九三年同貿易センター・ビル爆破事件、九六年サウジアラビア米軍住宅爆破事件、九八年タンザニア・ケニア米大使館爆破事件、昨年

イエメン・アデン港での米イージス艦爆破事件と同様に、オサマ・ビン・ラディンが関与するものと決め付けている。だがこれはあまりにも実証性を欠いた独断であり、事態の正確な認識を損なうだけでなく、米国民を反アラブ主義、人種主義にかりたてる悪質な反動的煽動である。

他方、今回の事件は、状況証拠的には、米帝国主義の経済、軍事、政治の中枢を申し分なく的確に目標とした軍事的攻撃であったにもかかわらず、そこにはどのような政治的メッセージも伴っていない。ここから想定されるのは、今回の攻撃者たちが、米帝国主義との政治的軍事的敵対性をいわば自明のものとして認識している集団であることであり、さらに政治的メッセージを伝達すべき他者を必要としない、あるいは考慮に入れていないということであろう。そうであれば認識を共有する自らの集団以外の他者はすべて「敵」とされることにもなりかねない。これはこの攻撃者集団が、宗教的カルト性を強くおびていることを推測させる。その反米主義についてはその背景にかかわって検討の必要がある。だが、推測が許されるのはせいぜいここまでであろう。

米帝国主義のグローバリズムや、親シオニズムへの敵対行動であることについては、蓋然的には想定しうるが、確定する根拠は何もない。米国における排外主義、愛国主義の高揚に乗じて、政府当局者が行う、フレイムアップやでっち上げに十分警戒しなければならぬ。マスメディアが、ろくに独自の調査もせず、この一方的報道をほぼ鵜呑みにして情報を撒き散らしているのは、恐るべきことである。すでに反アラブ主義、人種主義的な暴力事件が米国内外で多数発生していることが報道されている。

従って現状では、この悲劇についての、米帝ブツシュユのコメントだけが政治的に検討しうる言説である。ブツシュユは、同日の最初の声明で、可能な限り米国の愛国主義、排外主義の発揚を煽動した。翌一二日の二回目のメッセージでは、この事件を「戦争」と規定し、自国の戒厳状態と戦争動員とを正当化するとともに、世界に対して、自ら、

他国の国家主権を踏みこじることの正統化を要求した。これは直ちにわが国を含む世界中の帝国主義諸国の同意を得るところとなった。以後、米帝国主義と、これに追従する諸大国はわが国を含めて、戦争準備の道をはた走っている。この先に見えるのは、オサマ・ビン・ラディンの滞在先とされる、アフガニスタンへの大規模な軍事攻撃と侵攻である。これは、中東および、南アジアのきわめて不安定な政治的均衡を大きく破壊し、更に大きな戦争を誘発しかねない、重大な軍事的冒険である。本紙が発行される時点ではもはやこの侵略戦争は実際のものとなつていくかもしれないが、この新たな米帝国主義の戦争策動を許してはならない。あらゆる大衆的反戦行動の手段に訴えて、戦争発動阻止に全力を尽くそう。

今回の事件は、世界的覇権国家・米国の支配体制がけつして磐石ではないことを満天下に示した。ブツシュユの強がりにもかかわらず、米国の政治・軍事・経済の屋台骨は大きく揺るがされたのである。ブツシュユのMD計画は、根本から見直しが要求されている。この間のブツシュユ外交に顕著な、ユニラテラリズム（単独行動主義）の破綻は、ますます明らかなものとなった。世界的金融センターの物理的破壊は、米国経済、ひいては世界経済の全面的な後退の趨勢を一層明確なものにしつつある。資本主義の弔鐘は再び鳴りはじめている。戦争景気が息継ぎを与えることにはあるかもしれないが事態の趨勢は変わらない。この情況への準備を急がなければならない。

同時に、今回の事件に現れた、現代世界の歪みをただし、全世界の労働者階級人民の公正な世界秩序へと組みなおすための、国際主義的実践が問われていることを強調しなければならない。資本のグローバリゼーションと米帝国主義の単独世界覇権は、世界的規模での貧困、抑圧、差別、悲惨を一層拡大し、更に深々と構造化された暴力に新たな「世界無秩序」をもたらした。テロリズムの蔓延は昔も今も共産主義運動の立ち遅れへの罰である。この情況を一新する、プロレタリア国際主義の実践と、国際人民連帯の秩序が求められている。また資本の世界的運動に導かれて、帝国主義諸大国は、国民国家における個別

の国家主権さえ打ち砕いて、人民抑圧・戦争挑発の軍事行動に乗り出してきている。この帝国主義諸列強の戦争に抗する闘いの中で、地球人口の圧倒的多数を占める被抑圧諸民族人民の自決権を擁護し、長期にわたる友誼の蓄積の中で、階級的な連帯と融合を実現する、プロレタリアートの国際的団結の力が実際に示されなければならぬ。

プロレタリアートの国際主義的団結と力強い闘争が目に見える形で存在しないのならば、世界資本主義の運動がもたらす貧困と悲惨に耐え、人々に生きて闘い続けるための希望を示すことはできない。世界人民多数の一人一人の、幾重にも胸に畳み込まれた屈辱や困窮の体験や感情が、特定の宗教の精神的支配やこれに結びついた民族排外主義の感情による憎悪の行動に帰結するなら、世界人民の将来は決して幸福なものにはならない。国際的帝国主義支配秩序と闘う、こんにちの労働者階級人民のインターナショナルリズムの復権とその実践が切に求められている。

この事件のあおりを受けて、わが国株式市場は、あつという間に一万円の大台を割り込んだ。先の見えない大不況に突入している日本経済は、更に泥沼に踏み込みつつある。そうであればこそ労働者階級、

被抑圧民族人民、被差別大衆の連帯と団結が求められる。貧しい人々、虐げられた人々の団結と闘争だけがこの社会の行き詰まりを打ち破る。

最後にわが国支配階級の、この事件に便乗した、米帝にこびへつらう、戦争協力、有事体制作りの小さかしい策動を指摘しておく必要がある。防衛庁は「周辺事態法」の拡大解釈による、米軍支援策の検討をはじめ、それが難しいことがわかると今度は、政府が、「米軍支援II戦争協力新法」制定策動を目論んでいる。「自衛隊法」改悪も国会の上程の予定という。世界的な貧困と悲惨は、その原因そのものの一掃、つまり資本主義の廃絶によってしか解決されることはない。軍事的手段によって秩序からの逸脱や反逆を押し込めると考えるのは、最もおろかな選択である。更に、このおろかな選択に唯々諾々と追随するのは、もはや救いがたい行動といわなければならない。小泉連立政権の戦争協力、戦争参加を許してはならない。

事態は急迫している。最大の努力で職場、地域、学園に政治工作を打ち込み、緊急の諸反戦行動に全力で立ち上がれ！ともに闘おう。

(二〇〇一年九月一七日記)

# 共産主義者同盟首都圏委員会 第二二回総会に向けて

はじめに

同志、友人、『風をよむ』読者の皆さんに、同盟第二二回総会を来る二〇〇二年初頭に開催することをお知らせする。第二二回総会は本来本年夏季に開催する予定であった。しかし、山積する諸

課題に、われわれの活動量が追いつかず、およそ半年ほどの延期を余儀なくされた。このことをお詫びし報告することが本稿の目的の一つである。もう一つの目的はあらかじめ第二二回総会の課題を可能なかぎり公開し、同盟内外にこれの準備にむけた意見交換を促すことにある。

I 第二二回総会で練り越された課題

第二二回総会は昨年一月に開催され、その報告は同年八月に集約され、本紙五二号に公表された。従って次回総会を準備するにあたっては、この本

紙五二号の参照をお願いしたい。

第一一回総会で目標とされ、しかし練り越された課題は以下のとおりであった。

- (一) 革命的政治路線の形成
  - ① 日本帝国主義国家権力打倒・日本国家解体
  - ② 東アジア・環太平洋件人民連帯・米帝国主義の覇権主義反対
  - ③ プロレタリア権力闘争と政治的コミニティの形成

上記三つの軸に沿って、より明確な今日の共産主義運動の前進に資する政治路線を定型化することが求められる。

## (二) 政治・組織活動の指針

- ① アソシエーション論の共産主義運動論への読み替え
- ② 資本主義批判の徹底化による環境理論へのリンク
- ③ 資本の総過程からの労働者運動の再組織化
- ④ 組織指針として
- ⑤ 組織活動の多文化
- ⑥ 政治結社としての党の性格付け・諸政治結社による統一戦線の形成
- ⑦ 青年の組織化

上記の政治・組織活動の指針に関わる観点を簡潔にまとめること、これに踏まえ、革命的政治路線の形成の作業とも相即して、第九回総会（九五一年）以来の以下の、五つの政治活動指針、三つの組織活動指針も位置づけなおされる。

## ☆政治活動の指針

- 1 侵略と排外主義に反対し、帝国主義と闘う国際人民闘争への連帯を強化する。
- 2 差別と抑圧に反対し、国家主義的統合と闘う。
- 3 産業主義・経済成長主義に反対し、エコロジー運動を推進する。
- 4 労働者運動の階級的自立と国際主義的団結を強化する。
- 5 政治的社会的オルタナティブをめざす人民的共生・連帯運動を推進する。

## ☆組織活動の指針

- 1 次世代共産主義運動の準備に着手する。
- 2 ネオ/ポスト・マルクス主義政治思想潮流の形成を促進する。
- 3 非権威主義的左翼の結集（ヘゲモニー装置の形成）をめざす。

## (三) 『テーゼ』の作成

『テーゼ1995』の補足改定の作業は、第一一回総会ではまったく手をつけることができなかった。従ってこの課題は手付かずで練り越されている。『テーゼ』の項目を具体的にみると、A項は共産主義運動の原理的理論的問題を扱っている。B項は政治組織活動路線の骨子を当てることとしており、C項は政治組織活動路線の骨子を当てることとしており、D項は政治組織活動指針の確定を待たなければならぬ性格のものであることがわかる。またE項の過渡期世界論、現代帝国主義論は、こうした実践的立場の確定によって理論が成立するとい

う性格のものである。

従って、『テーゼ』作成は、政治路線確定の作業の進行に応じて現実化することになる。こうした観点から、継続して課題に取り組むこととした。

## II 第二二回総会以後の活動

### (一) 政治活動

引き続き沖縄人民の自立解放闘争に連帯する活動を政治闘争の中心に据えてきた。これが日帝打倒・日本国家解体の路線の基軸の一つであることとわれわれは確信している。しかし同時に、沖縄闘争へのかかわりが、沖縄人民の闘争を日本の労働者階級人民のありようを写す「鏡」として固定されてしまうならば、これもまた、利用主義のそしりを免れない。もう一つの路線的基軸をなす政治闘争の構造をつくらなければならない。反天皇制闘争であり、反安保闘争がそれに相当すると考えられるが、近年では、反改憲闘争がその発展性を持つものとして取り組みを試みようとしている。

またこうした政治闘争の基礎を、職場、地域、学園で形成するための工作についても引き続きの課題であり、その経験の集積と適用が更に追求されなければならない。

また『共産主義運動年誌編集委員会』の活動を継続し、これを基礎とする、協同の活動の試みも追求してきたが、十分な結果を生み出すには至っていない。

(2) 組織活動

同盟員の生活状況の多様化に伴う問題意識の多  
元化、高齢化による活動の分散化に対応する組織  
活動の多様なあり方を通じた連携の確保を真剣に  
考えなければならぬ段階がきた。機関紙を含む、  
定期的文書活動は、現在多くの同志の努力によつ  
て、この任に十分こたえているが、これを補う電  
子的意見・情報交換システムについて、その特性  
を生かした活用のある方が考慮されてよい。

また、よきにつけ、あしきにつけ『共産主義運  
動年誌編集委員会』の活動には多くの力を割いて  
きた。いまだその成果を、ともにこの活動を担っ  
てくださった『年誌』の仲間達と享受するところ  
には至っていないが、これへの期待を込めた少な  
からぬ手ごたえをかんじている。問題は、「非権  
威主義的左翼の結集（ヘゲモニー装置の形成）」  
というわれわれの位置づけと、『年誌』をはじめ  
とする協同の取り組みの現実との間をどのよう  
に考えるか、またそれと我々の組織建設との関連性  
をどう位置付けるかということにある。

また近年『風の学校』を青年学生を対象として  
数次にわたって開催してきた。位相を異にするに  
しても青年学生組織の形成についても『年誌』と  
同様の問題の検討が求められている。

(3) 機関紙活動

『風をよむ』は五一号以降、ほぼ定期発行のペ  
ースを取り戻した。隔月発行が政治的宣伝煽動の  
媒体として満足できるものではないことはいま  
もないが、現在のわれわれの力量の実勢からして、

最大限度の同志達の努力の結晶であることは、自  
己満足ではなく確認しておきたい。同時にこれは、  
『年誌』その他の活動にもとづく友人の皆さんの  
協力の結果でもあることを確認しておきたい。こ  
れはエールの交換という意味にとどまるのではな  
い。

同盟の政治機関紙としての『風をよむ』をどこ  
まで、どのように開いていくのか、あるいは、開  
かれた媒体としての『風をよむ』をわれわれがど  
う位置付けるのかという問題を呼び込んでいると  
いう事態の確認である。具体的な回答が要求され  
ている。

(4) 理論活動

MR研究会や、『年誌』その他などでの意見交  
換、理論研究の活動にも支えられて、一定の改善  
は行われている。しかし、諸政治活動の実際的な  
諸事情によって、かならずしも組織的に集約され  
てはいない。このことの克服を、『テーゼ』作成  
作業によって行うことが目標になる。

III 第一二回総会の獲得目標

ここまでの整理で、来る総会にわれわれが獲得  
目標に据えるべき課題はほぼ浮かび上がってきた。  
これをもう一度、(綱領・戦術・組織)の分  
野ごとに、それぞれの構成要素として集約しな  
すとおおよそ以下のとおりであろう。この三つの  
側面から資本主義の今日的段階に適合する共産主  
義運動のあり方を確認することが全般的な課題で  
ある。とりわけ戦術・組織の分野では、共同綱領

や政策協定の扱い方、共同戦線の政党形成の可能  
性についての検討などが課題に含まれる。

- ① 綱領の分野
- ② 『テーゼ』の作成
- ③ 戦術の分野

- ① 革命的政路路線の確定
- ② 政治・組織活動指針の確定
- ③ スローガンの再編
- ④ 統一戦線方針の確定
- ⑤ 青年・学生運動組織方針の確定

- ① 同盟の革命的政路結社としての位置づけ
- ② 同盟組織の再編成
- ③ 非権威主義的左翼の結集（ヘゲモニー装置の形成）と同盟の位置の確定
- ④ 政治組織活動指針の確定
- ⑤ 青年・学生運動組織方針の確定

上記の個々の課題は、それぞれの分野に重複し  
て存在するものもある。それは課題そのものの性  
格によるのであって、実際の検討作業は、それぞ  
れの個々の課題の必要性、重要性に応じて課題の  
まとまりごとに行われることになる。これらのす  
べてを達成するのは至難の業である。だが、現実  
の前に拝跪するのではなく、真剣に政治の再興を願  
うのであれば、われわれにとつてはどうしても越  
えなければならない関門である。

同志、友人の皆さんの積極的なこの作業への参  
加をお願いする。

(文責・畑中)

# 七・一五共産同政治集会への 連帯のメッセージ

## 共産主義者同盟首都圏委員会・畑中文治

共産主義者同盟(全国委員会)と、七・一五共産  
同政治集会に参加されたすべての仲間の皆さんに心  
からの連帯の挨拶を送ります。

このメッセージの要請を受けて、やや大げさな  
ら、私達は「朋あり遠方より来る。亦樂しからずや。」  
との感慨を催さざるをえません。耳になじん  
だこの成句は『論語 学而第一篇』の冒頭にあり、  
その前には「学んで時に之を習う。亦悦ばしからず  
や。」とあり、その後ろは「人知らずして慍(うら  
み)み。亦君子ならずや。」と続きます。宮崎市定  
(いちさだ)はこれを平易に解釈して次のように言  
い換えました。

「前に学んだところを、時をきめて(皆集まって)総ざらえる。こんな楽しいことはない。(思いがけず)遠方から(新しい)友人が訪ねてきてくれる。こんな嬉しいことはない。誰も自分を認めてくれないが、そんなことは一向気にとめぬ、そういう境地に私はなりたい。」

これをさらに私達の先に述べた感慨に引き寄せて  
言いかえれば、「時期を選んで同志友人を結集して  
政治集会をおこなうと、思いがけない遠い縁のある

ブントの分派から連帯のメッセージがある。日本の  
階級闘争も捨てたものではない。わが国社会ではい  
まだ多数を獲得してはいないが、孤立を恐れず共産  
主義運動の実現を目指す革命党でありたいものだ。」  
排外主義。国家主義をおおる「歴史・公民教科書」  
はもつてのほかですが、若い世代に学んでもらうべ  
き、新しい歴史・公民教育にはこうした徳目を盛り  
込みたいものです。

私達は、共産同(全国委)の皆さんの活動を遠く  
からまた近くから見聞きして、およそ次の三点につ  
いて学ぶことができると考えています。第一に粘り  
強く階級的労働運動を組織し、一貫して共産主義と  
労働運動との結合を追求していること、第二にアジ  
ア人民との反帝共同闘争を推進しプロレタリア国際  
主義を実行していること、第三に世代を継いで共産  
主義運動と、マルクス主義、レーニン主義に基づく  
党建設を堅持し続けていることです。七〇年以後の  
三〇年、そしてとりわけソ連・東欧激変以後のこの  
一〇年を、こうした成果をあげつつ歩みつづけてき  
た「全国委」の皆さんの労苦が並大抵のものではな  
かったであろう事は、私達自身の経験を振り返れば

容易に推察できますし、したがってこれに私達は大  
きな敬意を払うことを惜しむものではありません。  
とはいえ皆さんのこの倦むことのない労苦が本当に  
報われるとすれば、それはわが国労働者階級人民多  
数が、資本と国家の圧制に抗して、皆さんの呼びか  
けに応え、社会主義・共産主義革命の闘いに立ち上  
がることをおいてはならないことでしょう。(中略)

国内に向かつては、なりふりかまわず「構造改革」  
の名のもとに、あからさまに一握りの大独占の延命  
のために大多数の人民の犠牲を強要し、国家主義・  
排外主義的政治統合と差別・抑圧を強め、外に向か  
つては米帝国主義との政治軍事同盟を一層強めて、  
グローバリズムと新自由主義の名のもとに多国籍企  
業の利害を代弁してアジア諸国人民との敵対を深め  
る現実があります。そしてこの資本の世界的な運動  
と帝国主義の支配は、直ちに地球環境の取り戻しの  
効かない一層の破壊を引き起こしています。これが  
わが国のみならず世界の労働者階級人民の利益を損  
なうものであることは明らかです。

こうしたわが国支配階級の攻勢はすでに始まって  
います。これに対する労働者階級人民の反撃もおこ  
なわれていますが、それが一層強力なものになるた  
めの関門は、参院選挙後の政治再編以後に訪れるで  
しょう。いわゆる「小泉改革」なるものが無残な結  
果に終わることは少し冷静に考えれば誰にでもわか  
ることです。政治改革も経済再建も地に足のついた  
何の客観的な根拠もなく、ただ情緒的なアジ演説と  
その場しのぎの取り繕いの数字で出来上がっている  
ことは、すでに心有毒識者達から指摘されています。

問題は「小泉バブル」のはじけたあとの階級闘争の局面を、共産主義者が支え、切り開くことにかかっています。大言壮語は無用です。私達の限られた力量で支えきれぬ事柄は限られているでしょう。気負いもてらぬ自らの力の及ぶかぎり、この資本主義社会の継続には労働者階級人民の未来はないこと、共産主義だけがその病理の克服と展望の提示をおこないうることを社会的実態をともなつて実証することが求められます。勿論これは熾烈な政治と社会の諸領域での闘いをももたうことになるでしょう。またこれはひとつの関門にすぎません。こうした

きわどい修羅場のいくつもを経た先にしか共産主義運動の今日の復権はないでしょう。もとより全国委員会の皆さんと私達の進む道筋は異なってきました。ここ当面はいくつかの交錯を交えながらも、かならずしも等しいものとなるとは限らないでしょう。このプロセスが、わが国の戦後階級闘争と共産主義運動の歴史的经验をもエピソードにしてしまふほどの広さと深さを獲得することにならなければ共産主義運動の再生はおぼつきません。冒頭触れた『論語』にも「和して同ぜず」の一句があります。しかし、歴史を形成する階級闘争にしたがうかぎり、

いつしかお互いの力量の拡大に伴って合作することになることもまた大いにありうることです。この展望を念頭において、私達は全国委員会の皆さんとの今日的な協力の回路を探したいと思ひます。私達も力の及ぶ限り、わが国とアジア、環太平洋圏、ひいては全世界の階級闘争に貢献する実践を積み重ねていく所存です。共産主義者同盟（全国委員会）の健闘を願つてやみません。私達もまた皆さんに連帯を訴えることに恥じない実践を重ねていきたいと思つています。ともに闘わん！

# 流 広志さんへの返事

竹田 晋

## 次世代共産主義運動の再建を勝ち取るう

最初に、私たちは、共産主義者同盟（火花）、流氏のご寄稿（風五七号）に感謝するとともに、互いの議論を通じて、共産主義運動の戦列の再建に有用な意見交換を心から期待したいと思う。そして、火花のみなさんの批判、意見について、真摯に受け止め、弱点击破の糧にするという姿勢で、若干の意見を述べさせて

いただきたい。この文書を作成するにあたり、火花二七号に掲載された九四年改定の綱領を讀ませていただいた。第一印象は、基本的に正しい内容である、という感想である。今日の共産主義運動の惨憺たる現状の裏には、マルクス・レーニン主義思想の後退があり、他方、アソシエーション論

に名を借りた市民主義への埋没や協同組合主義への回帰などが、公然と台頭している現実がある。ブントの中でもパラダイムチェンジと称して、共産主義運動からの撤退を表明した人々もいる。こうしたなかで、一貫してマルクス・レーニン主義の旗を降ろすこと

まず資本主義批判についてである。綱領のなかで語られる資本主義批判は、資本主義生産関係の発展によつてもたされる階級の分化と賃金奴隷制を批判し、労働の社会的生産力の増大による階級隷属の強化など、一連のストーリーのもとに、共

産主義社会を作り出す諸条件の成熟と、資本主義生産関係の「墓堀人」たるプロレタリアートが形成されるとされる。マルクス主義を標榜する以上、このフレーズを否定する人はいないだろう。しかし、問題はその後である。資本主義の墓堀人たるプロレタリアートは、そのままの形で、革命の主体にはならない、ということがこのかんの歴史は証明している通りである。これはわれわれの九五年のテーゼで主張しているキーポイントでもある。資本主義の分析と批判がアプリアーに共産主義の誕生を促すという伝統的な資本主義批判をこそ検証しなくてはならない。

したがって、プロレタリアートの概念も然りである。古くは「国際主義と暴力」に組織されたプロレタリアートという物言いがあり、「プロレタリア本理論」との論争もあった。「あるべき階級」が散々模索され、主観主義の思い込みと片思いが延々と議論された。今日の資本主義社会では、生産手段を占有し、社会的富を集中するブルジョアジーと、生産手段をもたないプロレタリアートが主要な階級をなしているのは自明である。だが、それは一定の生産関係の中で占める役割と地位の相違が形

成する「人間の集団」であり、いわば関係的な概念でマルクスやレーニンは語つていたことを忘れてはならない。賃金奴隷制の批判と所有制の批判はそのまま変革の主体たるプロレタリアートに形成されるわけではないのである。そこに、われわれが主張する階級形成論の前提があり、プロレタリアヘゲモニーの視点が導きだされるのだと思う。また、われわれの言うプロレタリアヘゲモニーの形成は、当然、プロ独の萌芽を含むことになるかもしれない。今いえることは権力奪取の主体であり、同時に社会革命の主体たる「階級」を形成していく不断の共産主義運動のなかに萌芽を見出すという以外ないはずである。

「労働者階級の一部であるプロレタリア党がそれにどう関係するかが問題となる」

この流氏の設問に対応するのは難しい。率直に言つて「現在進行形で変化」しているのは党の措定の問題であるからだ。

われわれの系譜の整理で言えば、第二次ブントの分裂過程では、東京ブントを主要な論争舞臺に、戦旗派の党・軍・統一戦線論に反対するい

わゆる「情況派」（旧共産同再建準備委員会）に所属していた。そこでわれわれの論点の一つは、党・軍・統一戦線論といういわばピラミッド型、あるいはツリー型の党組織論が、大衆運動の自然成長性に依拠した解党主義であり、軍事的左派を標榜しようがしまいが、大衆運動の動向に左右される市民主義左派でしかなかく、他方で、大衆運動を自らの綱領に独断的に従属させる革マル主義に転落する以外にないと批判してきた。しかし、その後は、社会情勢の左派的ムードに押し流されて、第三インターマルクス主義に無条件に依拠した党建設に傾斜してきた歴史がある。そして、九五年のテーゼでは以下のような整理を行つてきた。

「今日の労働者政党は、（中略）階級政党であれ、革命党であれ、その編成原理に、（市民社会—国民国家）の政治的ユニットに組み込まれている。／これに抗する例は、（中略）固有のイデオロギーと政治の技術性とを内容として、国家権力の掌握を意識的に追求した政治結社の伝統を残して形成されたレーニンの党

と、世界党を直接的に実現することをめざした初期コミンテルンだけだろう。だがいずれも程なく、国民政

党に回帰した。」

この総括に基づいて、リゾームないしセミ・ラティスの組織と政治の闘争原理に基づく戦闘組織としての要素をもつ二重理論によつて構成される党をイメージした。つまり、当面の現実的選択を基本に党建設の方向性を提示しようとしたにすぎない。

ここで私たちが言いたいことは、第一に、〈市民社会—国民国家〉の外に、党を描くこと、したがって、誤解を恐れずに言えば、労働者階級の一部という表現をも留保する。第二に、ツリー型の組織も当面留保しつつ、不断の政治闘争に対応できる能力をもつた党組織の建設である。この一見矛盾とも思える組織論は、ターニングポイントにあるわれわれの現実として了解してもらふ以外にない。

ターニングポイントで言えば、われわれは、ネオ・マルクス主義の研究などを通じて、従来の第三インターの失効を確認してきた。この経緯をここで詳しく論じても仕方がないが、ブルジョアジーに取つて代わるべきプロレタリアートという階級概念の捉え方だけでは、今日の国民国家解体の道に対応する国家論を探る

ことは困難であるということだ。グラムシの再評価と、陣地戦論の採用も、これまでの思想的営為の一つであり、党の戦術としての現実的選択であると考えている。とくに、社会情勢に応じた共産主義運動のヘゲモニー装置を獲得することを通じて、革命の主体形成を図ること、これは切実な要請であると考える。

例えば、地域におけるコミュニティの形成、職場や工場、組合などを通したヘゲモニーの形成のプロセスでは、多様な階層の「新しい社会運動」に込めていかななくてはならない。即時的な「社会運動」に終わらせることなく、共産主義の世界認識とどう結合するのか、あらゆる活動家が

直面する課題である。現在の社会運動では、結集軸が分散し、労働運動、市民運動などあらゆる社会運動が放置され、自然発生の海に漂っているのが現状である。われわれが現在、主要課題として闘っている安保・沖縄闘争を例にとれば、現実に米軍基地に反対する多くの労働者、市民がいる。米軍や日本政府の横暴で差別的な政策に怒りを感じる人々は少なくない。しかし、どこに結集して闘うのか、どんな観点で闘うのか、「共産主義者」は、その革命的独善とセクト主義とによって、戦う意思のある人々とのコミュニティが図られていないのが現状であろう。沖縄闘争は、

単なる反基地という民主主義的課題だけでなく、国家の有り様を問うものでもあり、歴史的には日本帝国主義の植民地支配の継続に対する闘いである。こうしたことを暴露し、宣伝扇動する基本的な党の役割が果たされていないのである。

(4)

そこで、私たちが強く主張したいのは「非権威主義的左翼の結集」である。非権威主義としたのは、共産主義運動に不可欠な議論を暴力で封殺するセクト主義を排し、闘う意思のある人々の前で堂々と議論できる環境と舞台を作ることが不可欠だからである。それは同時に、七〇年代からの新左翼が党派闘争の原則を踏

みにじり、スターリン主義の泥沼に落ち込んだ敗北を総括するものである。「革命的共産主義」に象徴される権威主義に、謙虚な共産主義を対置するわれわれの持論でもある。

共産主義者同盟(火花)の諸君をはじめ、ブント系の諸君、さらに、ブントとは異なる系譜の中で闘ってきた党派も含め、広く共同した舞台を形成することで左翼の大転換を図りたいとわれわれは思う。労働運動でも、市民運動でも、底辺労働者の闘いでも、学生運動でも、あらゆる分野で力と知恵を出し合う関係を再建しよう。こうした努力こそが次世代共産主義運動に繋ぐ私たちの義務だと思ふ。

### 黒麹宿主

#### 第六回

## オーソドキシシーの必要は思うもの

・天皇条項がある限り、護憲という立場は取れない。また第九条が「沖縄基地」によって

成立しえたことを考えなければならぬ。「反復帰論」とは、七二年の「復帰」を指すのではない。国家にすりよるといって「復帰」に反対するという立場。個人として自立(自律)することだ。ヤポネシア論からでは、「反復帰論」は出せない。また「本島・宮古・八重山・先島」という差別構造は、厳然としてある。「われわれは…」という視点の必要、よりもやはり「個」に徹することからしか始まらない。

・現実的情况に対応する(出来事を後追いつける抗議行動)だけではだめだ。理念・ビジョンが必要だ。では、どうするのか、という具体案はない。(「囲む会」での発言から)

八月二十七日、那覇にて、「新川明さんを囲む会」が行われた(主催・沖縄講座)。いつものサングラスをキメたスタイリッシュなイデタチ。話された内容もスタイリッシュと言え、そう感じられる。運動が高揚している

## 奇稿エッセー 沖縄頼り

際、オーソドキシシーな言葉は力を持つし、必要とされる。ただ、まったりとしてしまっている時には、その言葉にモチベーションを引き上げる力はないだろう。新川氏が、おっしゃったよう、大田知事(当時)の土地収用代理署名拒否の最後での裏切りが、沖縄人に絶望感を作った、という側面は、今も続いてあると思う。地道な「後追い行動(大卒の県民集会)」すら、昨年来**低調**している。

そうした意味では、昨年サミット時の「レツドカードムーブメント」、『うるまネシア』『EDGE』等の切り込み方、また、「満月祭り」「大空・平和祭り(八月二十六日に沖縄市で第一回が行われた)」「ニライカナイ祭り」「あま世祭り(昨年の若者独自の企画)」といったフェス系の動きが気力を引き上げ、実際の交流に寄与していることは大事な要素である。その中で、語られる言葉がオーソドキシシーの極みのようなものであっても、スタイルやテーマ設定によってかなり受け取られ方は変わってくる。先日の浦添の「キンザー包囲行動」から今回の沖縄講座の企画のような諸々の独自イベントが、大卒の県民集会の高揚へと結ばれていくと思いたい。自分もまた、来年(「復帰」三〇年)に向けた企画を、ささやかながら取り組んでいきたいと思う。

新川氏のご発言は、そうした意味のオーソドキシシーとは異なる。言うならば、個人主義アナキズムに近い。シュティルナー、大杉栄といったあの系譜である。「アナキズムとは

政治思想ではなくて、**心意気**のことだ」と、大学初学年の頃、あるマルクス主義の方に言われたことがある。当時は、むきになってクロボトキンやら何やらを持ち出して討論しようとしていたものの、今となれば「心意気」のことではいいのではと思う。煎じ詰める新川氏の言葉はそういう類のものでは。「では、どうするのか、という具体案はない」というロジックも、聴衆・は領くしかない。

むしろ印象に残っているのは、主催の方の「(沖縄)原体験としての新川明」という言葉である。『反国家の兇区』(現代評論社七一年/社会評論社 九六年)によって触発され、沖縄を引き寄せて考えるようになった、という趣意と思う。そのモチベーションが持続され続ける。この誌で繰り返し提唱されている「次世代共産主義」という言葉も、モチベーションの継承と考えると分かりやすい。つまり「心意気」。

去る五月、『モトシンカランヌー』(NDU制作)という、「復帰」前のコザの娼婦街に陣取り、狼歌をBGMにおり混ぜながら、娼婦達の心情や全軍労、「日本」からの労組等を取材したフィルム上映を、東京の友人達と那覇で行った。来年「復帰三〇年」を向かえ、**年々淡くなる歴史実感を、**オーソドキシシーではない視点から取材した「復帰」前のフィルムを通して考えてみよう、という趣旨。「沖縄イニシアティブ」に新聞紙上で対応した、新川明氏・目取真俊氏らの

「歴史体験が許さない」という、若者には山の向こうの立脚点からの反論を、自分なりにさぐるとすれば、というところも。

沖縄の若者にとって、強く「平和運動疲れ」というものがあるように感じる。毎年スケジューリング的に組まれ繰り返される集会。労組動員・市民的良心、若者が入り込みたいと思える要素の少なさ。また、アングラな叙情性や若者の運動の独自性は、特に生まれていく必然性もあまりないような気もする。「基地に對する」という運動の必要性があまりにも大きすぎるゆえ。

こんな風に書くと、怒られる。ただ、東京の「全貧連」や「小倉あやまれ友の会」というタイプの運動は、沖縄ではなかなか出て来ないだろう。そして求められもしないのではと思う。**伝承**の祭りを大事にする、というのはプライドでもある。しかしながら、オーソドキシシーを「後追い行動」として展開するのでは、どうしても限界があり、理念と魅惑的な実行が求められているのは、当然のことである。

来年**五月**には、様々な企画が準備されていくことと思う。大卒の県民集会はもとより(昨年はかなりの日和ぎみだった様ながら)、九七年の「沖縄独立をめぐる激論会」を継承する某かの企画が行われるのではないだろうか。様々な諸団体も諸々考えているだろう。その中で、やはり自分達なりの独自企画を、と思う。

### 3 憲法について

憲法は、通例、国家の統治体制の基本を定める法の全体をいうと定義される。国家が成立する以上、そこで法律はどうして作られるか、その法律をどうして執行するか、裁判をどうして行うか、というような事がらについての法がなくはならない。それらの法の全体が憲法である。ふつうの団体でいえば、その規約にあたる。(『世界憲法集』「成文憲法概説」宮沢俊義)

日本政府は、1946年2月13日に連合最高司令官が日本政府に提示したいわゆるマカーサー草案にもとづいて新しい憲法草案を起草し、それが、明治憲法73条の定める手続により、天皇の発議と帝国議会両院の議決とを経て、日本国憲法として成立した。日本として、二番目の成文憲法である。／従来の天皇主権主義を否定して国民主権主義をとり、徹底的な国際平和主義にもとづいて戦争を放棄し、軍備を撤廃し、個人の尊厳に立脚する基本的人権の尊重を定めたことにおいて、明治憲法とは、原理的に、区別される。(『同上』「日本国憲法解説」宮沢俊義)

### 4 わが国の憲法状況

1999年05月24日	周辺事態関連法(周辺事態法、自衛隊法改悪、ACSA改悪)成立
07月08日	地方分権一括法(軍用地特別措置法改悪など)成立
07月29日	憲法調査会設置のための国会法改悪
08月09日	国旗・国歌法成立
08月12日	盗聴法成立
08月13日	外国人登録法、入管難民認定法改悪
09月23日	新ガイドライン発表
2000年01月	衆参両院に憲法調査会設置
11月	日本共産党第22回大会で「自衛隊活用論」を打ち出す。
2001年04月03日	「新しい教科書をつくる会」=扶桑社版中学教科書検定に合格。
04月26日	小泉連立政権発足。かつてない高支持率を記録。
07月	都立養護学校、一部私立学校で「作る会」教科書採択。
08月13日	小泉首相靖国参拝強行 などなど。

沖縄、普天間基地移設問題、続発する米兵の犯罪、基地被害

教育基本法改悪の動き

中・高校生の意識調査の国際比較(2000年7月、日本、韓国、米国、フランスで実施)

日本の中高生の6割は21世紀に希望を持たず、人生目標も、地位や名誉、社会貢献より「楽しく生きること」を一番に考えている。(『朝日新聞』8月1日朝刊)

### 5 わが国政治状況の規定要因—国際的枠組み

#### ①経済のレベルで

金子さんが「今危機は始まっている」とするその危機とは、銀行の不良債権問題と国家財政の累積債務問題ですが、後者は国家財政の構造問題で、日本のような3千億ドル以上の対外決済準備を抱えている国では、直ちに金融危機、為替危機として爆発するような性格のものではありません。これに対し前者は、銀行システムのバランスシート危機であり、どこかで金融機関の決済デフォルトが発生すれば、一挙に金融恐慌へと発展する可能性をひめています。これはアメリカでは対世界バランスシートの問題となっていますが、こうした点についての危機意識は、金子さんの独自認識というよりも、BISを初めとする今日の金融当局の共通の危惧だと見てよいでしょう。(『情況』2001年8・9月号『現代資本主義と宇野経済学』岩田弘の発言)

金子が「利下げの危機」と規定するのは、アメリカ株式市場の市況対策と景気挺入れの目的を持つFRBの「利下げ」が他方では「巨額の貿易赤字を抱えてドルの信任問題という爆弾を抱えて」いるアメリカからの「金利差」による「資金移動」(アメリカからの資金逃避)を引き起こし、国際金融システムの動揺に結果しかねないからである。すなわち、FRBの相次ぐ利下げは、過剰ドルのアメリカへの還流の攪乱要因となり、国際短期資金の均衡破壊的な流動性を高め、国際金融システムの不安定性を増大させる。センター市場アメリカにおけるハード・ランディングの危機である。(『同上』五味久壽「今資本主義に何が問われているのか」…『情況』2001年5月号金子勝「今、危機なのか」の要約)

## 土曜会・夏期合宿・報告

### 状況論—政治革命の再興

わが国における憲法問題を切り口にして

2001. 08. 19.

畑中文治

レジュメについての筆者解説

レジュメをそのままに読者にお目にかけるのは誠に恐縮だが、抜本的に手を入れる余裕もないこと、また、現在の私どもの政治的関心の所在を、早期に知っていただく必要性もあることとの判断から、そのまま紙面で紹介する。反改憲闘争の一助としていただければ幸いである。また政治革命の再興を強調したのは、昨今の社会革命議論の過度の蔓延を憂慮したが故のポレミックであることはお断りしておきたい。当たり前のことではあるが、社会革命と切り離された政治革命があるはずもない。ただ、政治党派であれば、政治革命についての見解を明確にすることが第一義的な任務であるとの考えで、あえてこうしたタイトルをつけた次第である。

「土曜会」については、以下少し解説しておこう。本年1月に行われた催しの案内状にはこうある。「土曜会も発足以来、はや五年になります。」「土曜会の正式な名称は関西政治・文化研究所といいます。二ヶ月に一回土曜日に研究会を開くということで通称を土曜会としました。」そして以下、研究内容の紹介が続く。その要点を筆者が勝手に紹介すれば以下のとおり。「われわれは、権力奪取後しか社会革命—最大限綱領の実現は不可能であるという考え方—政治革命先行説に理論的、実践的に挑戦する。『新しい社会運動』には社会革命を先行的に実現する文化的・社会的・経済的条件が存在する。とはいえ国家・社会を覆い尽くす社会革命の完遂には政治革命が必要条件であることには変わりはない。だがその政治革命は社会的公共性を代表する連合した社会権力によって遂行され、国家の公共的機能を最小限度にきり縮め、社会的公共機能に転化する。国家権力は連合した社会権力のもとに統制する。」

はたして以下のレジュメは、こうした問題意識とのきり結びができていだろうか?

読者のご検討をお願いしたい。

#### 1 憲法問題をめぐる最近の発言から

憲法の条文をあれこれ言う前に、国民の憲法を生み出す精神(立憲精神)の形成に努めよということとはぼくらが日常的・市民的な過程、俗にいう社会的な過程で民主的な、自由な主体としての在り方を追求せよということである。これは抽象的であるというなら、主権在民ということを経験過程で血肉化せよということに他ならない。例えば、ぼくらが企業の中で、市民社会の中で、民主的で自由な主体として存在し得ないなら、つまりこういう精神が国民的な精神として社会の中で、日常的に存在しえないのなら、憲法が国民のものとして実質化することはないのである。(「憲法の背後こそ撃て」三上 治)

憲法調査会の成立によって憲法改悪阻止の運動は新しい段階に入る。まず、この憲法調査会の活動を監視する必要がある。そして本格的な憲法論をはじめめる必要がある。その核心は、主権在民、非武装平和主義、基本的人権の尊重、この憲法3原則が古いかどうかだ。これは本来、人類全体の普遍的価値になりうるものであり、古いどころか、戦後の日本でまだまだ実践できていない問題である。この憲法のもとで基地があり、安保体制があり、自衛隊があり、差別があった。この違憲国家状況をまず正さなくてはならない。ある意味で私達の立場は「護憲」ではなく、この3原則を実現させる闘いである。(『QUEST』第5号「改憲論の噴出と市民運動の課題」高田 健)

#### 2 衆議院憲法調査会地方公聴会監視行動の取り組み

第1回仙台公聴会(4月16日)／前日の市民集集に100人参加など。

第2回神戸公聴会(6月4日)／志摩さんのレポート参照。(『風を読む』第57号)

において、今日もはや存在しなくなっている。(『情況』2001年8・9月号 片桐薫「イタリアの総選挙・ポピュリズム・若者層」)

『世界』2001年8月号「決壊する戦後保守政治(下) 第4章 支持の社会的基盤」(三宅一郎)

旧中間層:「自営商工業者」と「農林漁業者」

新中間層:学歴と所得の高い「管理職」「専門・自由・事務職」中心

小泉人気で、このところ自民党支持率は急速に回復している。…その結果、自民党支持率はどの社会カテゴリーでも他党支持率を凌駕するという八〇年代半ばの「包括政党」的な支持パターンに戻るだろう。

『同上』「おわりに—自民党はどこに行くのか」(星浩)

今の自民党は、抜本的な構造改革を担える政党とはいえない。小泉首相の提唱する構造改革と自民党の古い体質に大きな落差がある。そうである以上、小泉改革は自民党の壁に阻まれて頓挫するか、改革の内容をめぐる自民党が分裂するか、のいずれかの道を進むことになるだろう。

小泉政権のポピュリズム

小泉政権はオールライトにはイデオロギーの面を強調することで「ライト」的な側面を示し、ニューライトには郵政事業の民営化という新自由主義政策を掲げ、リベラル勢力には新しい政治スタイルを示すという政策的な使い分けを巧みに利用しているのである。(『情況』2001年8・9月号 星野智「カオスに向かう日本政治」)

結論

わが国支配階級には、この閉塞状況を突破する展望はない。

そうであるがゆえに、東アジア諸国・諸民族の中での孤立主義と、民族排外主義の運動が醸成されていく。

既存の政治秩序の解体と再編が進み、労働者階級人民の登場の機会が生まれる。支配階級の新たな秩序形成と排外主義勢力の突出についても同様。

これに抗して、反改憲闘争、反帝国連帯を軸にして地域・職場、街頭、キャンパスの政治的空間に労働者階級人民の自己権力を組織すること。政治的コミュニティの形成。

アソシエーションはその基礎になる。とりわけコアコミュニティ。

権力は対抗的に形成される。

統治の権力と、プーランザスのいう併行的権力網との闘争。

(ハンナ・アレントの評議会民主主義)

たしかに革命政党は、評議会制が新しい統治形態の出現そのものにはかならないということ、理解できなかった。しかし評議会のほうも、近代社会の統治機構が実際、どれほど巨大な管理機能を持たなければならぬか、理解できなかったというのも事実である。評議会の致命的な誤謬は、いつでも、彼ら自身、公的問題への参加と公共の利益にかかわるものの管理あるいは経営とをはっきり区別していなかった点にあった。…すなわち第一に評議会は、もともと常に政治的なものであって、社会的・経済的要求は非常に小さな役割しか果たしていなかった。そして第二に、革命政党の眼から見れば、評議会の「下層中産階級的・抽象的・自由主義的」メンタリティの確かなしるしであったのは、まさにこのような社会経済的問題に対する関心の欠如であった。(『革命について』)

(カール・シュミットの友・敵の政治)

消費—生産組合 (cf.NAM)。

ところで、この地球ぐるみの経済的・技術的集中と結びつく恐ろしい権力が、いかなる人々の手に帰するであろうか、ということが、当然問題とされなければならない。その際には万事がまさに「おのずと運び」、ものごとは「おのずと管理されるであろう」、またそのさい人々は、絶対に「自由」なのだから、人間の人間に対する支配など不必要になっているであろう、などと期待することによって、この問題は、決して片付け去るわけにはいかない。人々が、何を自由をうるか、まさに問題となるからである。これに対しては、楽観的な推測でこたえることも、悲観的な推測でこたえることも可能であるけれども、これは結局すべて、人間学的信仰告白に帰着するものなのである。

『大恐慌型不況』(佐美光彦・講談社刊)

②世界的市場支配

多国籍企業による世界市場支配と、EU,NAFTAに示される広域経済圏形成・市場統合。

1995年 WTO発足。法的強制力をもった市場支配秩序。

OECDによるMAI(多国間投資協定)の準備。

WTO「貿易に関する投資措置に関する協定」(TRIM協定)など

③政治軍事支配

米帝ブッシュ政権によるNMD-TMD戦略。SDI計画の焼き直し。

世界戦略の見直し。

これらに対抗する99年シアトル以来の反グローバリズム(反WTO,反G8)国際行動。

④アジアにおける政治経済の不安定性

政治的経済的基軸国の不在

冷戦構造の残存

6 わが国政治状況の規定要因—国内的枠組み

90年代バブル前後からの失われた10年

国家的政治、経済的指針の喪失、ヘゲモニーの不在。

その結果としての政治の漂流、政党の溶解。長期不況への無策。

日本社会・国家の伝統的な構造問題。

80年代新自由主義・中曽根戦後政治の総決算の問題。

戦後政治構造の解体。(保革構造、春闘構造。総評の解体・連合成立。社会党の解体。など)

中曽根の新自由主義路線は、戦後革新と労働者の団結を破壊したが、他方戦後保守とりわけ旧中間層を温存し、更に自民党との連立勢力が、事実上の国民的包括政党としての役割を果たし、強固な戦後政治構造の残存を結果した。言葉を変えれば国家独占資本主義の構造的温存。(政官財トライアングル)

これが現在の、金融、不動産、土建、流通など不良債権累積業種に反映されている。

その結果が、バブル崩壊以後の大競争時代への立ち遅れ、長期不況への突入をもたらした。

7 戦後政治秩序における2つの憲法外的要因

憲法3原則。

・日米政治軍事同盟と自衛隊 → 集団的自衛権へ

・戦争・戦後責任と天皇制の残存 → 国民統合とアジア的戦後秩序との相克

日本帝国主義の成長とともにその国際的プレゼンスとこれらの矛盾がもはや放置できなくなったこと。

あからさまな欺瞞が、国民の政治意識を大きく損なったこと。

8 支配階級の自己分裂

ここ数年来、イタリアを含め先進資本主義国における主要政党には、共通して見られる傾向がある。「右」であれ「左」であれ、有権者の三分の二を占める「中間層」の獲得をめざして「中道」を競っていることであり、しかもそこでは左側が右側の理念を取り入れ、また逆に右側は左側の政策を受け入れており、「右」とか「左」といった従来の線引きの意味は乏しくなっていることだ。それは結果として、二つの重大な問題を招来している。一つは、有権者の政治離れをひきおこし、ほとんどの選挙で投票率が50パーセントを割るという状況をもたらしている。それは「投票」という「民主主義確認のセレモニー」そのものの危機と、有権者の意思決定という政治制度が機能しなくなっていることを意味する。もう一つは、主要政党のこうした「中間層獲得」の指向が、有権者の三分の一以上を占める社会的アンダークラス(サブスタン)の要求を切り捨てさせることにもなっているという事実だ。貧困層に配慮し、それを代弁するのが「左翼」だとしたら、そうした意味での「左翼」は、先進諸国



# 〈先住民族としての権利〉と沖縄

(寄稿 K・F)

七月六日、『先住民族としての権利と沖縄』をテーマにした公開講座が横浜駅西口の神奈川県民サポートセンターで開かれた。講師は沖縄市民情報センターOCCIの喜久里康子さん。主催は、沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(略称沖縄講座)で、連続講座『沖縄と日本』の過去・現在・未来』の第二回(第一回については本誌前号で紹介した)。

七月六日、『先住民族としての権利と沖縄』をテーマにした公開講座が横浜駅西口の神奈川県民サポートセンターで開かれた。講師は沖縄市民情報センターOCCIの喜久里康子さん。主催は、沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(略称沖縄講座)で、連続講座『沖縄と日本』の過去・現在・未来』の第二回(第一回については本誌前号で紹介した)。

スピーチを聞いたときの日本の外務官僚の慌てぶりが目に浮かぶ。実際、今年の三月の国連人種差別撤廃委員会に彼女たちが提出したNGOレポートは海外の委員らの注目を浴び、委員会の最終所見で沖縄人の置かれている現状について日本政府に二〇〇三年までに報告するように勧告した。

喜久里さんのお話のもう一つの柱は、既成の反基地運動の旧態依然たるスタイルへの批判だ。さまざまなアクショ

ンも大切だが、総決起大会で「がんばろう」と言われても、若い世代にはびんとこない。喜久里さんの既成の運動スタイルへの批判はそこにとどまらない。沖縄の中にある差別構造、アイヌや在日などの他のマイノリティへの排他的態度や女性差別にも目を向ける。特に女性差別に関わって、沖縄内の反基地運動の象徴に女子高校生や若い女性をまつりあげるやり方、それに便乗するヤマトの反基地運動にも言及する。(女性差別する)沖

喜久里さんは、『先住民族としての自決権』の視点から、沖縄の基地問題を「日本政府による沖縄差別政策の結果だ」として国連先住民作業部会や人種差別撤廃委員会などの場で訴え続けている沖縄の若い世代の一人だ。八月三十一日から南アフリカのダーバンで始まっている国連の『反人種主

義・差別撤廃世界会議』に『ダーバン2001』というNGOのネットワークの一員として参加している。「先住民族という言葉に、みなさん、どんなイメージを持つでしょうか。その疑問が、私たちの活動のそもそもの始まりでした」と喜久里さんは切り出し、昨年七月の国連先住民作業部会に参加した仲間、先住民族という概念が、果たして沖縄にマッチするものなのか、まだ始めたばかりでわからないのですが、とにかく、一度使ってみたほうが前に進むのではないかと考えました」と、率直な語り口がとても新鮮だ。国連で彼女たちの

反基地運動家?から「先住民族などというの、若者をたぶらかすもの。誤りだ。沖縄問題の本質は差別ではなく基地問題だ」と(日本と沖縄)の歴史的関係を捨象した的外れの(少なからずの年配の人たちに共通する)「お叱り」を受けたときの彼女の冷静な対応と、「自分で先住民族と思えば先住民族である、と言うのが国際法上の定義です。自分

が誰であるかは自分が一番よくわかつている。沖縄の人に、あなたは日本人ですか、ウチナンチュウですかと聞くとウチナンチュウと答えません」という若者特有の軽やかな言い方に共感した。

反基地や反安保一般で沖縄を語る「語り口」が日本の運動圏の中ではまだまだ多いのが現実だ。

喜久里さんは、『先住民族としての自決権』の視点から、沖縄の基地問題を「日本政府による沖縄差別政策の結果だ」として国連先住民作業部会や人種差別撤廃委員会などの場で訴え続けている沖縄の若い世代の一人だ。八月三十一日から南アフリカのダーバンで始まっている国連の『反人種主

義・差別撤廃世界会議』に『ダーバン2001』というNGOのネットワークの一員として参加している。「先住民族という言葉に、みなさん、どんなイメージを持つでしょうか。その疑問が、私たちの活動のそもそもの始まりでした」と喜久里さんは切り出し、昨年七月の国連先住民作業部会に参加した仲間、先住民族という概念が、果たして沖縄にマッチするものなのか、まだ始めたばかりでわからないのですが、とにかく、一度使ってみたほうが前に進むのではないかと考えました」と、率直な語り口がとても新鮮だ。国連で彼女たちの

反基地運動家?から「先住民族などというの、若者をたぶらかすもの。誤りだ。沖縄問題の本質は差別ではなく基地問題だ」と(日本と沖縄)の歴史的関係を捨象した的外れの(少なからずの年配の人たちに共通する)「お叱り」を受けたときの彼女の冷静な対応と、「自分で先住民族と思えば先住民族である、と言うのが国際法上の定義です。自分

が誰であるかは自分が一番よくわかつている。沖縄の人に、あなたは日本人ですか、ウチナンチュウですかと聞くとウチナンチュウと答えません」という若者特有の軽やかな言い方に共感した。

反基地や反安保一般で沖縄を語る「語り口」が日本の運動圏の中ではまだまだ多いのが現実だ。